

Title	創刊の辞
Author(s)	中岡, 成文; 鷺田, 清一
Citation	臨床哲学. 1999, 1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9305
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

創刊の辞

哲学というのはひとつの 知 である。あらゆる知識を基礎づける 知 であると自己規定したこともあったし、あるいは、「よく生きる」ことをめざす 智恵 として自分を理解したこともあった。しかし、哲学という学問が社会に、なにか楔を打つような力をもったことは、すくなくともわたしたちが生きるこの社会ではほとんどなかったようにおもう。

哲学するというのは、この社会のなかでどのようないとなみとしてありうるのか、社会はほんとうに哲学的思考というものを必要としているのか、そういう問題を問いつめるなかで、わたしたちは哲学を社会にむけて開く、あるいは哲学をその外部へと繋いでゆく、《哲学の臨床的転回》なるものを構想してきた。社会のさまざまな困難が発生している現場で、その困難が哲学的思考をもとめているときに、それにたいして何の応答をもできなかつたら哲学は死んでもいい、そのような切羽詰まった思いで、わたしたち大阪大学倫理学研究室のメンバーは、この四年間、大学内という限界はあるにもせよ、毎月公開の《臨床哲学》のシンポジウムを開いて、あるいは毎週金曜の夜にさまざまな現場のひとつとともに、ケアと看護をめぐる、あるいは子どもの不登校をめぐるディスカッションを積み重ねてきた。

そういう臨床哲学のプロジェクトに取り組んできた大阪大学文学部倫理学研究室は、一九九八年の四月、大阪大学文学部の大学院重点化にともなって大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室として再発足することになった。それとともに看護婦として現在も勤務しておられる方や元高校教師の方などが社会人特別選抜のかたちで、わたしたちの大学院の研究メンバーとして入ってこられた。このひとたちを含め、わたしたち大学院のメンバーと関西周辺の看護・介護関係のスタッフのひとつ、教育現場のひとつ、ジャーナリストなどと哲学研究者とが、ともに直面している 問題 に問題としての明晰なかたちを与えるべく、くりかえし議論してきた。このプロジェクトの報告は、これまで「臨床哲学ニューズレター」紙上でおこなってきたが、臨床哲学研究室の発足を機に、「臨床哲学ニューズレター」を二つの冊子に分解し、より細やかなフットワークが生かせるよう工夫することになった。

ひとつはすでに昨年十二月に創刊号を出した「臨床哲学のメチエ 臨床の知のネットワークのために」であり、いまひとつはこの論文集「臨床哲学」である。前者はわたしたちの研究室に所属している院生・学生を中心に「社会人」の方々も巻き込んで、臨床哲学の活動とほぼ同時進行的にネットワークよく伝言ボードのように機能するべく発行されたもので、後者は《哲学の臨床的転回》を課題として突きつめるために、あるいはその実践をくわしく報告するために刊行されるものである。前者は季刊で、後者は年一回、刊行するつもりでいる。ここに発表された活動報告にかんして、みなさまの忌憚のない厳しい批判やご意見をちょうだいできれば、たいへんにありがたくおもう。

大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室

代表 中岡成文

鷲田清一